

馬場孤蝶

環状線を廻る



環状線を廻る

一

生方敏郎君が先達て来て、魚藍坂ぎよらんざかが変っているので、場所が分らず、人に魚藍坂は何処だと聞くと、ここがそうなのだといわれたといつて笑っていた。白金の明治学院に学んだ生方君はこの辺はよく知っているのに、その生方君にまるで分らなくなったのだから、その変遷の程度はそれだけでもう誰にも想像ができるであろう。

十月のある日、秋晴れの快こころよい午後、環状線廻りをたのまれて、自動車で家を出た。魚藍は元よりのこと、伊皿子いしらいだって、吾々には、まるで外ほかの場所のような気がするまでの変り方だ。街幅の広くなつたのはいうまでもなく、坂の形がまるで昔の形を留めず、両側の家々が石段を上るようになっていたのさえ、全く跡方もなくなっている。

「横町に一つづゝある芝の海」という川柳は芝もずっと北金杉きたかなすぎあたりをいったものである。僕などの青年の時には、車町から品川の停車場ていしやばの間には海の側にはロク

に家がなかつた。あの辺の埋め立てをしたのは、牧野如石じよせきという、からすがね烏金でも貸そうというような、したたか者の盲人であつたというのだが、海寄りに十軒程を一棟にした長屋建ての商家向の家が建つて、ぽつんと一つ離れていてそれにはロクロク住む人もなく、殆ど立ち腐れになつていたことを確に記憶する。山手の方にしても泉岳寺前から先きは、低い混コンクリート礙土の塀や石垣の邸宅が続き一歩裏へ入ると大抵の家は生籬いけがきで邸を繞めぐらしているような淋しさであつた。それが何時いつとはなしに、今のような、海沿、山手共にあの通りの人家櫛比しつびの現状だ。

僕のこのあたりに関する記憶などは余りに古いのであるが、それにしても、変り方は実に驚くばかりの変り方には相違ない。

停車場から二三町^{ちよう}手前の右側（山手）に後藤象二郎伯の邸のあったことを覚えているが、明治二十一年頃、に、条約改正その他所謂三大建白のために上京した地方有志が後藤邸を訪うた時、後藤家では盛り蕎麦を饗したが、有志の多くは盛りの上からいきなり、汁をぶっかけてしまったという、落し咄そのままの話を聞いたことがある。田中君の『旋風時代』が、もつとずつと時代が進

むと、そんなことも小材料の一つになるであろうなど、心の中で微笑みながら、彼れあ此れこと古いことどもを憶い出しているうちに、車は容赦なく、少し肌はに冷たい風を切つて、停車場の少し先きの橋際はしぎわから、右へ折れて、八やつ山のぼを上り始める。

いよいよ環状線へ一歩踏み込んだ訳だ。此所には勿論昔は路がなかった。多分森ヶ崎とか云つたのである。長州侯の邸のなかを新たに切り開いた坂路である。勿論、まだ出来たての路と云つていいくらいの新開の路面なのだから、坦々たんたんとして、まるで何かで拭き取ったかのよう

な綺麗さ滑らかさである。このあたり、一帯に大藩侯の邸の多いところであつて、袖ヶ崎の薩州邸、大崎の池田（備前）邸の大邸が名高かつた、そんな大邸になると、大厦たいかの戸を開けるのに専任の係があつて、一人で朝からつぎつぎに戸を繰り開けて行くと、最後の戸を開けた時分にはもう夕暮になつていて、今度は最初の戸をしめ始めなければならぬようになってくるくらいであつたと、云い伝えられて居いる。

そんな大邸宅の建つた時分から可なり長い後まで、猿町の坂を下りると早や直すぐに、一面の稲田であつて、秋

ならば黄金色の波満々と風に揺れるという光景であつたのだが、それから後、田が埋められてからも、しばらくは、埋立地らしい赤土の広々とした空地を後にして、棟割の長屋が路に沿うて、気のなさきのうそうな風で立っているのを見たのは、まるで昨日きのうのような気がするくらいである。

そんなことを憶い出ずると、ここらの街景は全く大變遷の觀がある。

大崎から五反田へ向う街路は可なりな商店街をなしている。家々の規模は、相応な地方市の可なりいい街筋のありさまと同様である。いや、それどころか、三十年位前の本郷通りなどよりは、余程景気のいい街の光景である。

五反田の記憶は割合に新しく、震災二年前ぐらいに属するのだが、その時に比べてさえ、開け方は雲泥のちがいだ。これでは地方市の盛り場を凌いでいる。いや、此

の二十年前であつたら、これだけの街がかりの賑かさの場所は、東京でもそう多くはなかつたろうと思ふくらいである。勿論、新開という何処となく垢抜けのしてない雰囲気は濃厚であるが、旧市内だつても例れいせば小石川の柳町、本郷の肴町、動坂下、下谷の鶯溪などのような吾々の眼から見れば新開の空気の可なり顕然とした地区が少くない。いや、数え立てれば、そういう新開は旧市内には枚挙にいとまのない程多いのだ。旧市内のそういう土地の方が開け方は遅々としていたといつてよかろうと思う。

ここで、道路は少し大廻りの形になって、目黒川を渡って、目黒から渋谷へと互る郊外の旧市外廓をなしていった部分の外輪をめぐることとなる。この川の末が品川へ入って、本宿と橋向うとを別つのもあるかと思ひ、斎藤緑雨に橋向うの意味の説明を受けたことなどを憶い出でて、心に微笑を覚えたのであつた。しかし、後で考えると品川の橋はこの末ではな^{すえ}さそうである。

僕の昔の記憶によると、下渋谷から上目黒を経て、行人坂あたりまで出て来る路は、旧市寄りの丘陵を左にし、郊外の渋谷から続いている小丘を右にした谷あいのように

なところであつたと思ふのであるが、今の環状線からは右に松林を頂いた丘陵の連亘れんこうを見るのみで、左の方には余り高いところを一向に見ない。要するに、下渋谷から来ている丘地の西側即ち外廻りの平地のところを環状線が貫いているのだ。

不動堂へ入る横町を左手に見て、行人坂下あたりを越えろるといふと、もう商舗はぼつぼつになつて、郊外の屋敷町らしい気分が顕著になる、右は平地が少し連なつてから、その上が南北に互る低丘になつて居り、左は極く緩やかな傾斜をなして、武蔵野の外廓的高地へと上つてのぼ

居^おる。我等の行く手は先ず大体坦々たる平路であつて、前面の空の藍色^{らんしよく}広々と仰がれて、好晴^{こうせい}の秋日和の気分はいかにもさわやかに快かつた。

この路は下^{しも}、中^{なか}、上^{かみ}と目黒をば目黒川の西岸に沿うて貫きつつ渋谷へと向つて居^おるのだ。やがて、路は爪先上りになつて、道玄坂の上の方で、厚木大山街道へと出てしまふ。世田谷へと通じて居る昔からの往還なのだ。

いわゆる道玄坂から、宮益坂へかけてのこのあたり一帯の変り方は、吾々に取りつては、全く桑滄^{そうそう}の変^{へん}も啻^{ただ}ならぬ心持がする。日露戦役の直前ぐらいまでは、宮益が五

六間にしきや見えなくらいの路幅の、両側には生籬のある邸に沿うての狭いやや急な坂路であり、道玄坂までの間は両側が田圃であり、世田谷街道に食物店くいものみせといつては、坂を可なり上つたところのぼに、一軒蕎麦屋があるきりであり、丘沿いに停車場の方へ曲つて行く横町には、それでも一寸とした料理の看板をかけた家うちがあるきりというありさまであつた。明治四十一年頃になつてさえ、市内の寄席で、咄家が「この頃は上渋谷の道玄坂などが開けて、あの辺でも変り色の羽織を著た芸者が歩いてゐるといふのだから、東京も大變な変り方だ」などと、話

の前置にして話したくらいであったのだ。

大震災の恩沢に浴した土地の一つには相違ないが、それにしても、驚嘆に値する開け方だと思う。ここを起点にする電車線が二三線ある通り、懐は十分広い地区である。まだ今後の開け行く余地はあるであろう。

三

路は宮益の坂下から左へ折れて迂曲しつつ新宿へと向いている。

もうどうしても三十年の前であるが、新宿駅から渋谷へ出る路が、一半は生籬いけがきの傍に亭々ていていたる大木の槻並木けやきなみきのように列んだ東京郊外特有の農家めいた邸の連続、一半は茅かや、薄すすきの茫々と生おい茂った高低のある広野という風で、如何にも野趣満々たる景致けいちであったので、それが全く気に入って、当時下渋谷在住であった与謝野寛君を訪う時など、わざわざ新宿で下車して、渋谷まで徒歩したものであった。今その路はどのあたりなのであるうか。今はもう一体に人家もふえ土地も平にならされ、まるで見当がつかなくなってしまうのだが、地図を見る

と、昔のその路は代々木練兵場のなかへでも入っておるのではなからうかと思う。そうだ、右手に衛戍監獄えいじゆかんごくのあったことを覚えていゝるものだから、今の渋谷区の代々木深町、かみぞのちよう神園町、かななみちよう神南町、宇田川町というようなあたりに当るのであろう。

われ等の自動車は新宿に近づくに従つて、如何にも潔きよげな可なりな大ききの別墅風べっしよふうの邸宅の続いた町を通る。昔の番町、駿河台などの面影がこんなところに残つていゝるような心持がした。遠い郊外へ出ると、郊外とは名のみで、余り庭もないような家が建ち続いたり、さもなく

ば、周囲が余りに野味やみが多く、何んだか農家の仮家ではないかという感じのするような半洋館を見るのであるが、さすがに此の新宿裏あたりの屋敷町には何処までも日本式らしい建築の十分な落著おちつきがあつて、結構だと思ふ。どうせ他人のものなのだからどうでもいいようなものの、どっちがいいかと云われれば、こういう風に手のかかった小綺麗なものの方がいいと思ふ。塵ちりひと一つ落ちていないような、清潔な静寂な此の町の気分はまことに快かつた。

新宿近時の発達は全く文字通りに駭目がいもくに値するといわ

ざるを得ない。いわゆる馬糞の臭いと嘲けられたのは余りに古い昔ではあるが、両側にあの薄ぎたない暖簾をかけた陰鬱な大建物の間に、ぽつぽつと見る影もない小商店の介在していた時分から、今の繁華の街路までの発達には殆ど一足とびの観がある。殊に旧市内より最も遠い部分^{かいしん}が中心になったのは、停車場のお蔭、即ち、郊外開進^{かいしん}の恩沢といわざるを得なからう。震災の恩沢も十分ある事はあるが、新宿附近が殷賑^{いんしん}を極^{きわ}むるに至るのは、単に年月の問題であつたので、震災はただその時期を早めたに過ぎないであろう。この勢^{いきお}いで行けば、東京の繁華

西遷せいせんの期きが遠くはなかるうかと思われるくらいである。銀座よりもここは卑野であると人はいうであろう。ところがこの野風やふうが今の人々を引きつける力があるのだ。大衆を引きつけるにはこの野風でなければ駄目だ。銀座がだんだんこの野味に降参しだすと共に、やがては、新宿の方がその繁華において凱歌を奏するの日が来るのではなかるうか。

古い小咄に、行倒れの日記というのがあつた。無論、偽いつわつて行倒れとなつて、人から恵みを貰う乞食の日記という意味である。

「〇月〇日、神田にて行き倒れ候節さぶらふせつ、むすびに銭〇文。〇月〇日麴町にて行き倒れ候節、灸きうとむすび。〇月〇日、青山にて行倒候節、灸きうばかり」といふのだ。これは当時の各地区の人気と生活程度を暗示した笑話だと思ふのだが、昔は山の手といふのは、こういう風に蔑視されていたものであるが、これからは、新宿あたりの気分は一変して、却つて、下町こんにちの人気を笑う日が来ないとは云えなからう。とにかく今日の下町は住民の心持が一変しつつあるような気がする。古い東京は却つて片隅の四谷、新宿のあたりに残っているのでは

なかるうかというような気もする。

寄席などでは神田の立花が振ふるわなくなつて、四谷の喜きよしきが東京で第一の入りの多い寄席になつたという事実の裏には、東京の文化の配置とその変遷とについて何ものかを語るものがあると思う。

四

京王電車の発著駅から先き数町のところは路面がまだ出来上つていなかつたので車は大通りを右へ少し直行し

てから、左折して狭い新宿の華街かがいを抜ける。

いわゆるナイト・クラブの店がかりは、入口に目隠しのようなものが出来ている。洋館まがいの建方、夜見ればどうだか知れぬが、白昼の光線もとの下では、如何にも陰鬱な景気の悪いものに見えた。どうせ変態の場所には相違ないが、こうまで普通と違った重苦しい空気を作らずとも、何んとか工夫のありそうなものだと思われる。

左側の褐色に塗った家の入口には、まだ三十にはならぬと見える例の妓夫ぎぶく君が退屈そうに、粗末な椅子に腰を下していた。こういう職業も今にどうなるのであろうか。

その伝統の能弁と機智などは何処へ用いられるのであるか。

ひどく古い事と思われるであろうが、昔ある友と、吉原の狭い町を歩いていると、とある店から、「寄ってらッしやい。舶来とジャツパン」という声が掛かった。それは揚屋町あげやまちへ曲るあたりの河岸かしであったと思う。いうまでもなく、友は和服、僕は洋服であった。

五年程前かと思うのだが、僕の数字の誤記のために、ある人の旧居の位置が不確になったので、増田龍雨りゅううさんを引張りだして、吉原裏のあたりを見てもらった。その

途中、増田、久保田万太郎、平林襄二、新潮社の某君、及び僕と五人で廓内くるわうちをば、揚屋町の門へと抜けて行くこと、ある町の楼の前に立っていた若い妓夫君が、白昼のことではあり、気がなさそうに「おあがりなさい。名誉職のお方」といった。

吉原の小店では、昔は妓夫君が上った客の勘定の工合を、前以て客の履物で鑑定したという。あと減へりのしているような、少し履き古した履物であつたら、安心だが、小粋こいきな真新しいのめりの薄手の駒下駄などだと、この客は、翌日は馬だと覚悟するのであつた。ところが、近頃

になつては、それが反対になつてしまつた。つまり、履物も順当に、金銭のある者が新しい下駄を穿くようになってしまつた。履物だけは、見すぼらしい物を用いないというでんぼう、てつかの伝統が消えてしまつたのだ。こんな話を余程前に聞いたことがある。

店頭むげの素晴しき能弁も、通りすがりの客にかう縦横無碍むげの機智も、元より吉原の妓夫君の殆ど独擅どくせんのものといつて宜しかつたのであろうが、こういう不思議な職業氣質などは、遊廓の衰微と共に、遠からず消滅し去るものの一つであらうと思われる。

世の中が穩当に平坦にされて行くのは、まことに目出度いことではあるが、古き世の悠長さを伝えておるさまざまの、延びやかなる馬鹿げた物や事が、つぎつぎに進化變轉の大波に洗い浚さらわれて行くを見るのは、如何にも心淋しいことである。

こんな用もない追懷にふけつているうちに、車はもう大久保の大道だいでうを北へ向つて驀地まつしぐらに進んでいる。やがて、戸山練兵場の裏手である。それから、直きに戸塚の源兵衛の踏み切りの東を通る。ここを流れている川は神田上水で、この末すえが小石川の江戸川になる。この川の沿岸

の変遷もこれまた非常なものである。今より二十年も前には、源兵衛あたりは田舎の村の路に過ぎず、今の早稲田の市電の終点から流れに沿うて、関口の大滝に至るまでは、野川の堤防で、蘆荻ろてきいやが上に生い茂っていた。対岸には、工場こうばらしい家が一軒うち、それから、大分飛んで古い鳶色とびいろの藁屋の屋根が見えるぐらいなものであった。環状線が川を越すところから、少し下流に面影橋というのがある。しかし、ここは昔は橋などのなかったところではないかと思う。『南向茶話なんこうさわ』に出ている姿見橋一名面影橋というのは、穴八幡下にあった橋ではなかった

かと思われる。

五

牛込の馬場下から、戸塚の方へ行くには、穴八幡の下
 の狭い坂を上るのであったが、その上り口のぼのところに古
 称蟹川かにがわという小流こながれがあつて、それに小さい橋がかかつて
 おり、その橋を渡つて、早稲田大学の方へ行くようにな
 っていた。橋の袂にそば屋のあつたことを記憶する。即
 ち、その橋が、和田鞞負守祐ゆきえもりすけの女むすめ於戸姫おとひめが良人おつとの敵村かたき

山三郎武範を討つて後、のち身を流れに沈めて野川の底の藻も屑くずと消えたという伝説、又、將軍の鷹野の時、外それた將軍の愛鷹あいようがこの橋までその姿が見えたので、鷹匠たかじようが追つて行つて捉えたという伝説のある姿見橋即ち面影橋ではなかつたかと思う。

それはとにかくとして、この辺りは実に途方もない大變転だ。そんな小流は埋められ、橋などはとつくになくなり、穴八幡の前の坂にしても、もうなくなつてしまつているのでなからうかと思われるくらいである。

さて、吾々の行く道は、現今の面影橋、即ち、戸塚か

ら北へ真直に鬼子母神へと上^{のぼ}って行く路に架した橋から数町西の方で、神田上水、即ち井の頭上水を越して、高田へ入り、学習院の角で川越街道を横断し、鬼子母神から数町の西を廻り、小曲折をなして池袋へと通じ、巣鴨の山手線の少し手前で、大塚からの新道路を越え、やがて、その先きで鉄道線を横ぎっているのだが、このあたり一帯が見渡す限り青々とした菜圃^{さいほ}であったのは、まるで昨日^{きのう}の事であったような気がする。恐らくは精々^{せいせい}十五年ぐらい前から開けはじめたのではなからうか。この辺では、路が山形をなして曲っている。大久保からこちら

までの路になると、もう十分に郊外気分が濃くなり、旧式の手輓てびきの荷車などの往来を度々見かけたのであった。

巢鴨の踏み切りから以北は、路は殆ど直線をなして西巢鴨町を貫き、庚申塚こうしんづかの北で中仙道を横ぎり、滝野川を通って一路飛鳥山あすかやまへ突き当る。勿論昔の本郷からの路へは直角をなして合がっしている訳である。この桜の小丘しょうきゆうを見るのは、何年振りなのであるか。恐らく四十何年か振りではなかろうか。昔はここをもこんな狭いところとはわれわれは思っていないなかった。神田の学校はここまで

運動会をもつて来たのであった。当時の市内に公共用の空地の少かったことと、それ等の運動会の小規模であったことが、これで直ぐ想像し得られるであろう。いや、今日の若い人々にはそんな想像はしがたくって、却って嘘の話のように思うくらいであろう。昔と違い四辺へんも丘上も小ざっぱりと清潔になっっているので、なお一層山の地域が狭いように吾々の眼にも見えるのであるろう。

前に挙げた『南なん向こう茶さ話わ』は酒井忠昌の著で、寛延四年の手記のものであるらしいのだが、このあたりより青山百人町までは昔の鎌倉海道であったという記述がある。

即ち逆にいうと、千住から王子の脇の谷村即ち豊島村へとしまむら出て、滝野川、雑司ヶ谷、護国寺後、高田馬場、大久保、千駄谷八幡前、原宿を経る路で、そういう時代には、豊島村がこの郡の府であって、百人町から小田原へ向う路をば俗に中路と称えたというのである。そうすると今吾々の通って来た環状線はこの大昔の海道であった。全くの野中の路ともいうべきものの、西側の外廻りをば大きくぐるうりと一廻りして、ここらあたりで、その古道に合がしたことになるのらしいのだ。ところで、青山からの中路というのは、今の渋谷を通っておる厚木大山道と

大体同じものではなかろうか。ともあれ、この中路は小田原まで十八里で、日本橋から行く東海道より二里近いと記されている。

ここで前記の面影橋のことが気になるので、嘉永板の江戸地図を見ると、今の面影橋と同じ位置に橋がある。『南向茶話』には「高田の末すえより向うへ渡り候橋」とあるのだから、どうもこの橋らしくも思われる。前記の蕎麦屋の傍の小橋だというのは、筆者の記憶違いなのであろう。

六

今仮に、飛鳥山から千駄谷あたりまでへ直線を書いてみると、環状道路はこれに対して、大凡拋物線おおよそパラホフの形をなしているともいえるであろう。

さて、路線はここで飛鳥山の北横を小廻りして、低い傾斜を下り、東北線の鉄路を越える。この川は名主の滝をなしておる石神井川しやくじいがわで、本流は殆ど真直ぐに東へ向い、豊島と小台おだいとの間で荒川へ注いでおるのだが、支流は飛鳥山から上野へ連互れんこうしておる丘陵の東麓に沿うて南

へ向い、根岸へ入っていわゆる音無川となっておるのだ
と思う。

今はその音無川も川ではなくって全くの泥溝どぶになって
しまった。今から四十年ぐらい前までは、旧市内でさえ、
少し場末へ行くと、可なり水の澄んだ、小魚こうおの影ぐらい
は見られるような小流があつたものであつて、それらが
町家ちやうかの間にあつて、一種の半都会的の景物をなしていた
のだが、それらの風情ある小流は大抵は皆埋められてし
まい、僅に残っているものは、水汚れ、流れ細つて、小
虫さえ住まぬ泥溝になってしまった。沿岸一帯に人家の

稠密ちゆうみつになつた結果で、是非なきところである。

このあたりから、吾々の車は車頭を東南へ向けて、三の輪をさして急ぐのであつたが、尾久おぐえき駅あたりからは、さすがに沿道に雑草の生い茂つた空地が見えて、如何にも郊外らしい空氣が濃まやかである。家々の規模も余程小さくなりだした。路は滝野川区の東北端をかすかすのところで横ぎり、荒川区の南寄りを東へと貫いているのだ。昔は本所あたりは下町の敗残者の逃避の地区であつたといわれた。なお窮迫の度の増すに従い、更に奥へ奥へと引っ込んで行くのであるが、その引越し荷物を見てさ

え、その家運衰退の度合いが明らかに看取されるとい
のであった。即ち、初め両国橋を越える荷車には、まだ
しも少しは見栄えのする物が積まれているのであるが、
次の場所へと向う車上には、次第にガラクタの数さえ減
って行くというのであった。

今この新市の北端に住む人々を旧市からの敗残者であ
るとはいい難がたかろう。これ等の人々は、一朝いつちよう運来らば、
大都の中心を一気に攻略せんがために、空拳くうけんま先ず外郭よ
り攻め落さんといそしむ勇敢なる小市民であろうとい
度たいのだ。

尾久駅の傍を過ぎてからであつたと思ふのだが、両側の家々が殆どみな仮小舎こぼのような小屋しやうおくになり、商品が路傍へ滾れ出したように列べられ、まるで、露店の街のように見えるところがあつた。そういう街の中心へ入る前、右側に、菊の鉢を歩道の縁へりへまで列べた植木屋らしい店を見かけたが、この霜に傲おごるといふ豪華な花の紅黄白、色とりどりの豊艶な姿が、四辺あたりのくすんだ物の色のなかから鮮かに抜け出しているのが眼にはいった。

古著の店、古靴の店、古金物ふるかなものの店、露天向の玩具おもちゃの店、新品ながら三等品、四等品と見えるさまざまの商品を

ごたごたと店先きへぶちまけたようにならべた小店、それ等の店が皆屋根は、塗りも汚れきつた古亜鉛ふるたたんを屋根にした、仮小舎用の細い柱の、形ばかりの小舎である。どう見ても、片田舎の市場でもなければ、都会では到底見られない雑然たる光景である。要するに、此所が都会と田舎との境目という感じではあるが、それでいて、田舎には見られない不思議な一脈の活気が漂っているように見える。

大都会という多足たそくの大動物はその触手をさし伸して、周囲の村郊を腹中に抱入ほうにゆうせんとするといふのであるが、

この大蛸おおだこたる大東京は、これ等雜然、混然たる北郊の一角をば、その吸盤多き手で吸い寄せ得るであらうか。土地そのものはすでに吸い得た。希わくは、今の住民諸君を圏外へ押し退けることのなからんことを望む。

七

ある人々は、これ等の商店、商品の雜多にならんでおる有様から、支那にある泥棒市の光景を憶い出したといつた。このあたりの商品は勿論贓品ぞうひんではなく、人も決して

て犯罪者でないことはいうまでもないが、支那の泥棒市
というのは、甚だ面白いものだと聞いている。盗まれた
品物が、翌朝早くその市へ行ってみると、必ず何れかの
店に出ておつて、僅の金で買い戻せるというのである。
普通吾々は中古ちゆうぐでまだ使える品物を盗まれた時には、
同じような中古の品を見附けて買って来るといふ訳には
行かぬのであるから、誰しも新しい品を新に買うことに
なる。そうすると、それは吾々に取っては甚大な負担に
なることはいうまでもあるまい。ところが、泥棒市の如
きものがあつて、そこへ早く駆けつけければ盗まれたその

同じ品が新品の三分の一なり、五分の一なりで買い戻せるとすれば、盗難から来る損害は極めて小害で済んでしまふ理窟である。文化の進まざるところ、治安の行政の行きとどかざるところには、またそれはそれで一種奇妙な便法が行われるものだと、微笑を禁じ得ない訳である。

路は三河島の東端から、なお一層南へ曲折し、常磐線の鉄路を越え、二三の輪町へ入る。ここは下谷区であつて、その北がいわゆる骨こつ（こつ）即ち小塚こづかツ原ぼらである。やがて、路は三の輪車庫の裏手数町しょうひがしのところ、正東へ転じ直きに浅草区の文字通りの最北端を通じておる。その

幾分下谷寄りのところで、はなかわど花川戸からせんじゆ千住へ通じておる陸羽街道を突っ切るのであるが、その北、鐵路を越えたところが、往時の小塚ツ原、即ち南千住であつて、近年までこの娼楼が数軒淋しげに路傍に列んでいた。浄瑠璃などにある小磯ヶ原というのはここであらうと思ふのだが、線路の下に濡ぬれぼとけ仏が見えたことを記憶する。今はそれはどうなつたのであらうか。或はこの辺少し鐵路の模様が變つたのではなからうかと思ふ。とにかく、上野から行くと、鐵路の土手下、右手に大きい青銅の濡仏があつたと思ふのである。

地図で見ると、このあたりでは環状道路が浅草の北の区界ぎりぎりのところを東へ通っている。恐らくこの道路の北側は荒川区になっておるのではなからうか。地方じかた今戸町いまどまちから南千住へと出る路は大昔は隅田川添いの沢地であつたと見え、ところどころ沼のようなものが見えて、じめじめした如何にも場末らしい見すばらしい地域であつたのだが、今はなかなか潔げな物静かな街路になつておる。文明の恩沢というべきところであろう。

吾妻橋から以北、千住大橋までは、吾々の知っている時代は勿論、幕政時代にも橋は一つもなかつたようである。

ところが『南^{なん}向^{こう}茶^さ話^わ』を見ると、左の通りの記述がある。

「橋^{はし}場^ば辺^{へん}の義、此地の古老物語りにいにしへこゝに橋有候故、橋場と号しけると云、その儀尋候所に、只今隅田川渡し舟有之候所より川上壺町程に古の橋杭残り、折^ゆふし往^ゆ来^きの船^ふ筏^{ねい}にかゝり候由なり」

橋場の渡しは近年は寺島の渡しと呼ばれていたのである。この記述によるとすれば、現今の白^{しら}鬚^{ひげ}橋^{ばし}附近（或はその少し下流か）に往時——寛延よりずっと以前——橋があつたものと見なければならぬことになるのである。

路は、その白鬚橋を渡つて、向島区へ入る。即ち、こ

の頃まで、向島の寺島村、隅田村と唱え来った地区である。路線は白鬚神社のところから、斜に東南へと向い百花園を右にし、玉ノ井を左にして、昔の吾あ孀ずまむら村の方へと向っておる。また『南向茶話』を引くが往時の本所は現今の地区よりはかなり北までをいったものらしい。

八

その『南向茶話』の一節には、本所は本庄というのが古い名であって、今の信越線の熊谷の先きに本庄という

地名があるので、同名を嫌って、元禄年中本所と改めた
とある。梅若の事跡については、猿楽伝といううたい謡の由
来及び謡の家元しだゆう四太夫の家伝を記した書物には、家康の
関東入国後、武蔵の国を謡ったものが余り少いので、命
じて梅若事跡の隅田川の謡を作らせた。その頃、夫婦の
非人があって、梅若の有様を物真似して歩いたというの
だから、余りそう古くからの伝説ではなかりそうである。
ある説には、事跡は上古じようこ円融院の時代（凡およそ九百五十年前ぜん）
の事だというのだが『茶話』の筆者は、それよりずっと
後の足利時代乱世の頃のことであろうと思うと記してお

る。又、文明の頃（凡四百五十年程前）五山僧横川叟景三よかわそうけいさんの詩集にも梅若童子悼とうという詩があるから、或はその時代のことも知れぬとある。それから又この土地に業平天神その他業平に縁故のあるらしいような地名があるのは、伊勢物語にある都鳥の歌などから、業平を祭ることになったが為であろうと云ってある。それに因ちなんで憶い出すが、荻生徂徠の『南留別志なるべし』には、伊勢物語は歌の作例を示したものであるであろうと思う。これを伝記的価値のあるものとするのは誤りであろうとあるのだが、これは道理ある説であろう。

一体、本所の郊外寄りには、小梅といい、中ノ郷といい、わりげすい割下水といい、砂村といい、縛られ地蔵（これはかさく仮作）、置いてけ堀、狸囃子等のいわゆる本所の七不思議等さまざまの伝説に富み、且演劇、小説の場面に使われておる地点を多く有する地区である。大都の場末ではあつたが、それでも交通その他の関係で、人的交渉が多かつたので、山手よりは多くさまざまの物語のなかに使用されるに至つたのであろうと思う。

環線道路は、曳舟川を越し、直線的に進んで、おむらい（おむらい小向井？）に至つて、右へ向けて少し弧線を描き、

福神橋で北十間川を渡り、房総線の亀戸停車場の西側を掠めて南向しておるのであるが、吾々が往時は郊外の果だぐらいに思っていたところの押上、業平、柳島、亀戸天神などはこの大路線からいえば、西側、即ちずっと内側になってしまった。これだけでも、市域の拡大したことの概念が得られるであろう。

街路は荒川区の場合とは違い、そう新開らしい珍奇な光景は見られない。勿論、所がらさして目立つ程の活気は見られはせぬが、両側の小商店皆かなりな落著を見せている。甚だしく新しい新開の地域でないためかも知れ

ぬ。福神橋のあたりは天神の直ぐ裏手に当るくらいなのだから、この辺などは割合に早く開けたものと見て宜しかろうと思う。

北十間川を越えると、区は城東区になり、町は亀戸町かめいどまちになる。新市はまだこの先き放水路を越して、北から足立区、葛飾区、その南に江戸川区と、下総との国境江戸えど川縁がわべりにまで広がっているのであるから、もう、尾久おぐ、三河島、向島、亀戸あたりを郊外の新開のように思うのは、吾々の全く時代後れの考えである。

又、西の方でいえば、板橋区、中野区、杉並区、世田

谷区、その南で荏原区、大森区、蒲田区という風に、神奈川県との県境、六郷川まで延長しておる、新市は全くとてつもなく広がったものである。

さて、環線道路は五ノ橋ごはしでたてかわ豎川を渡って、大島町へ入ってから、現今のところ、少し未了になっておる。この路線は新市からいえば、外廻りの路ではなく、むしろ中心に近い目黒、渋谷、淀橋、豊島、滝野川、荒川、下谷、浅草、向島、城東区の十区を貫通するに過ぎないのであるが、しかもなおその幅凡十三間、延長十里になんな垂んとする大路線なのだ。

日本文学電子図書館

環状線を廻る

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治の東京」

中央公論社

昭和17年5月15日 印刷

昭和17年5月20日 発行



日本文学電子図書館